

『国際助産活動論』の授業評価と今後の課題

中越 利佳, 森 久美子, 上野 恭子, 北原 悦子, 今村 朋子
高田 律美, 井上 明子, 田中 祐子, 野村 亜由美, 城宝 環

『国際助産活動論』の授業評価と今後の課題

中越 利佳*, 森 久美子*, 上野 恭子*, 北原 悦子*, 今村 朋子*
高田 律美*, 井上 明子*, 田中 祐子**, 野村 亜由美***, 城宝 環***

Evaluation of the “International Midwifery Activities” Course: Toward Building a Better Education System for Midwifery Students

Rika NAKAGOSHI*, Kumiko MORI*, Kyoko UENO*, Etsuko KITHARA*
Tomoko IMAMURA*, Norimi TAKATA*, Akiko INOUE*, Yuko TANAKA**
Ayumi NOMURA***, Tamaki JOHO***

Key Words : 国際助産活動 授業評価 到達目標 異文化理解 内なる国際化

序 文

厚生労働省の看護基礎教育の充実に関する検討会報告により¹⁾平成21年度から「国際社会において広い視野に基づき看護師として諸外国との協力を考える」が組み込まれ、国際看護教育への取り組みが課題となっている。また、全国助産師教育協議会においても広く国際的視野を持つ専門職業人の育成を目指し、1年以上の助産師教育において、総合助産学として国際関連科目を位置付けた。主な内容としては、在日外国人への支援と国際助産師活動の実際があげられている。

愛媛県立医療技術大学は、平成24年度から助産学専攻科が開設され、助産学実践領域の1単位15時間の選択科目として「国際助産活動論」を設置した。シラバスを作成するにあたり、他大学助産学専攻科の国際関連科目の教育実態を知るためにWeb上で公開されているシラバスを検索した。Web上でシラバスを公開している25大学の助産学専攻科において、国際助産関連科目を設置している大学はわずか9大学であり、全て1単位15時間の選択科目であった。主な科目名は「国際母子保健学」、「在日外国人と母子保健」、「国際助産論」、「助産師の国際活動」、「国際化と地域母子保健」、「在留邦人の母子保健」であった。主なキーワードは、「国際保健・国際母子保健」、「地域社会」、「共同体」、「国際協力・国際組織」、「在日外国人」、「ミレニアム開発問題」、「リプロダクティブヘルス/ライツ」、「ジェンダー」、「異文化理解と異文化看護」であった。助産学専攻科として国際関連科目を設置している大学は少ないこと、講義内容のキーワードか

らも国際助産に関する内容は少なく、国際看護や国際母子保健と関連する内容が多くみられていた。

愛媛県立医療技術大学助産学専攻科における「国際助産活動論」では、以上のようなキーワードを網羅しながら、担当教員の海外での活動体験を基盤に、世界各国の出産と育児の文化や助産師活動に焦点を当て、異文化の理解と尊重、異文化のコミュニケーション、問題解決法を中心とした講義を展開している。2年間の国際助産活動論の授業概要を表1に記す。本講座が開講されて2年間が経過した。愛媛県立医療技術大学助産学専攻科での国際助産教育は、広く国際的視野を持たせる教育となっているのであろうか。本稿では、愛媛県立医療技術大学助産学専攻科における国際助産教育の取り組みの現状と課題についての分析結果を報告する。

方 法

1. 研究対象

平成24年～25年度に国際助産活動論を受講した助産学専攻科学生20名

2. 研究方法

愛媛県立医療技術大学FD授業評価アンケートと講義終了後のリフレクションシートからデータ収集を行い、質的に分析した。

3. 倫理的配慮

授業評価アンケートは、愛媛県立医療技術大学FD委員会の規定に従って回収・集計した。リフレクションシート活用に関しては、授業評価や授業改善、研究に使用す

*愛媛県立医療技術大学保健科学看護学科

**聖泉大学看護学部看護学科

***甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科

表1 国際助産活動論の授業展開（平成24-25年度）

回	平成24年度		平成25年度
	テーマ	主な内容	追加事項
第1回	国際社会と母子保健	わが国の国際化と母子保健 開発途上国の母子保健の現状 妊産婦の健康に関する世界的な動きと活動 在日外国人の母子保健	ミレニアム開発目標の達成と周産期の健康問題との関連性
第2回	諸外国における助産師活動・先進国編	アメリカ医療と医療保健, 医療従事者の職種, ニューヨークの助産師	変更なし
第3-4回	諸外国における助産師活動・開発途上国編	開発途上国における助産活動の実際 NGOによる開発途上国の母子保健・助産活動の実際 ワーク: 私の考える母子支援事業	セーブ・ザ・チルドレン 母の日レポートからの課題
第5回	開発途上国, 在日外国人への助産活動時に必要な異文化理解と問題解決法	クロスロードゲームによる異文化体験と問題解決法シミュレーション演習	変更なし
第6回	世界の出産と文化	アメリカ, オランダ, モロッコの出産事情の抄読会とディスカッション	NHKドキュメンタリー 「赤ちゃんの運命を決めるもの」の視聴から「貧困」が出産・子育てに与える影響
第7-8回	国際社会に生きる助産師としての将来像	グループワーク「国際社会に生きる助産師として, どんな助産師の実を实らせたい? 実りのための方策は?」 発表とディスカッション	変更なし

るものであり, 個人が特定されることはないことを説明し同意を得た。

結 果

対象学生のうち平成24年度。愛媛県立医療技術大学助産学専攻科学生10名, 平成25年度専攻科学生10名, 合計20名の授業評価アンケートとリフレクションシートが回収され, 分析対象とした。

1. 授業評価

2年間の授業評価を図1に記す。「学生の予習・復習」は4.1であったがその他の項目は4.3以上であった。特に, 「学生の熱意」, 「発言機会」では, 4.8~4.9と高得点を示した

2. 国際助産活動論での学び

授業評価の自由記載およびリフレクションシートから学びの内容を分類し, 主な記載内容を表2にまとめた。国際助産活動論の学びの内容は, 「異文化理解と尊重」, 「内なる国際化」, 「世界的視野」, 「自文化の理解」, 「ジェンダー」, 「問題解決のプロセス」, 「国際社会に生きる助産師としての姿勢」であった。

考 察

1. 授業評価から

全ての評価項目が4.0以上であり, 講義に関する学生の満足度は高いものであると推察できる。とりわけ, 「発言機会」, 「学生の熱意」の評価点が極めて高く, 学生が積極的に講義に臨んでいたことがわかる。本講義は, 一方向の講義形式ではなく, クロスロードゲーム^{注1)}やグループワークを取り入れ, ディスカッションを行う機会を多く与えている。とりわけ, クロスロードゲームは²⁾, ゲームという解放された雰囲気の中で自分と異なる意見を聞いたり, 他者が思い通りに動かないことに対する感情を経験したりすることで, 新しい見方や考え方に気付くことが多いとされており, そのような経験が学生の学習意欲を高めた要因ではないかと推察する。

一方, 予習・復習の評価が最も低いことに関しては, 学生に課題を与えていないこと, 問題提起の形で講義が終了していることが要因ではないかと推測する。本講義は, 学生の視野を広げ, 柔軟な思考を身につけることを目標の一つとしており, 講義で興味を持った課題に関しては, その後の自主学習に期待するところとなっている。今後は, 演習として事例を提示し, 学生自身で学習を深められるような授業展開を検討していく必要がある。

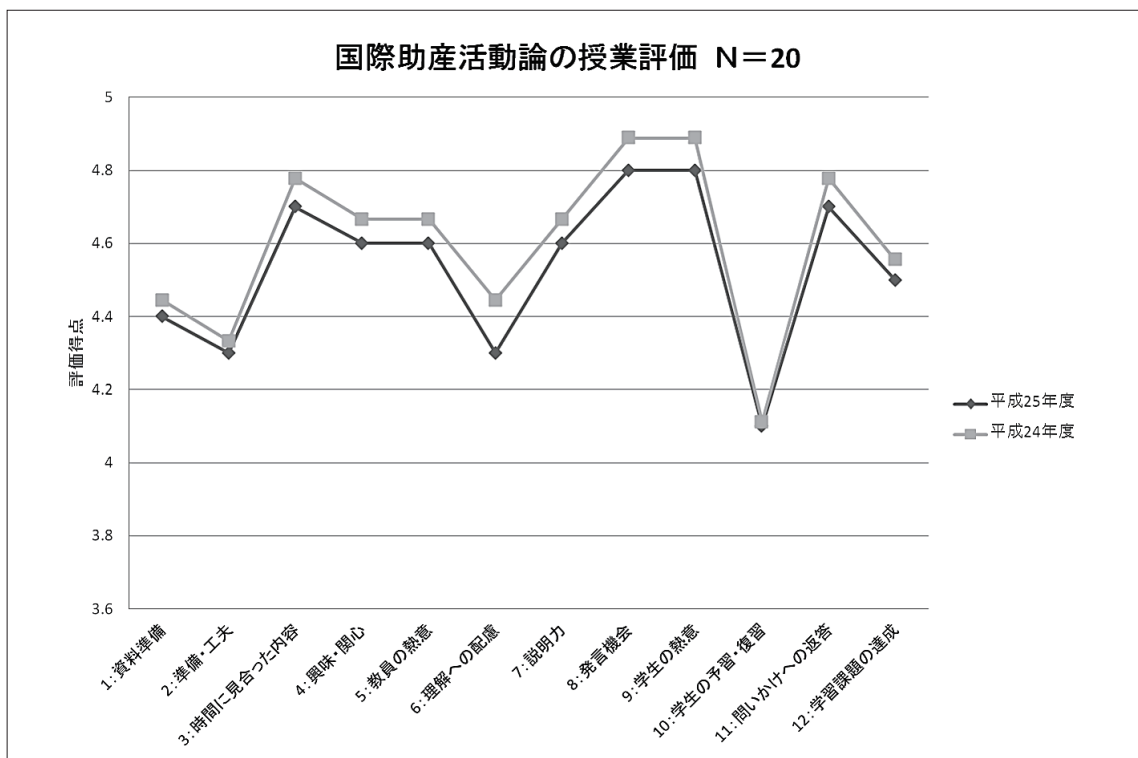


図1 平成24・25年度 国際助産活動論 授業評価

2. 国際助産活動論の学びとわが国の異文化看護・助産の教育現状

国際看護活動論の学びを学生の自由記載から分析すると、最も多かったのは、異文化と自文化の理解と尊重であり、続いて内なる国際化、世界的視野を持つことであった。異文化・自文化の理解と尊重、内なる国際化の理解は、国際看護、国際助産の実践において基礎・基盤となる考え方である。本来、このような視点は学部教育で学んでほしい内容であり、大学の助産学専攻科での教育として考えるならば、ジェンダーや問題解決のプロセス、国際社会に生きる助産師としての姿勢にもっと力を注いでいきたいところである。しかしながら、学生の出身大学で国際看護関連科目を設置している大学はなく、愛媛県立医療技術大学助産学専攻科で初めて国際看護・助産を学ぶという者ばかりであった。そのような学生のレディネスから、国際社会における助産師の活動を中心軸としながら、異文化理解と尊重、自文化の理解、内なる国際化の理解に焦点を当て講義を進めているのが現状である。

吉野らが行った国際看護教育に関する調査によると³⁾、国際看護を担当している教員の悩みとして、「自分の経験では内容に限界を感じる」「研究的・理論的な不足を感じる」「内容に対して時間数不足」「教授内容の範囲の広さ」「国際看護学の定義が不十分」「大学で学ぶ到達点不明」といった内容があがり、看護基礎教育における

国際看護の位置づけや、学習の到達目標が明確に定まっていないことによる教育の課題が指摘されている。国際的視野を持つ看護師・助産師の養成を謳っているにもかかわらず、我が国の看護基礎教育、助産師教育における国際看護・国際助産教育の学習到達目標は明文化されておらず、実際の教育内容は各大学によって様々であり、大学による国際看護・助産教育に大きな差が生じていることが推測される。

一方、海外の看護基礎教育をみていくと、アメリカ、カナダでは、看護基礎教育の学士課程において到達すべき異文化理解と異文化看護のためのコアコンピテンシーが明文化されている。American Association of colleges of Nursingでは⁴⁾、①多様な背景をもつ人々への看護・ヘルスケアに影響を及ぼす社会・歴史・文化的な要因の知識を理解し、適応させる能力②生活習慣・文化に合わせた適切なケアを提供するために根拠のある妥当な情報源から情報収集を行うことができる能力③異なった人種へより安全で質の高いケアを提供するために努力を続ける能力④正義を主張する：脆弱な民族への健康支援と不当なヘルスケアの排除を遂行する能力⑤文化的な発展のための活動に常に関わることができる能力を挙げている。Aboriginal Nursing Association of Canadaでは⁵⁾、異文化の対象理解のためのコアコンピテンシーとして①歴史・文化の理解②コミュニケーション能力③包容力④異文化の尊敬⑤異文化固有の知識の理解⑥異文化の看護学

生の学習支援といった6つを掲げている。

以上のことから、本学の国際助産活動論の教育内容は、異文化理解・尊重という視点において、アメリカ・カナダの異文化理解、異文化看護のためのコンピテンシーに一部合致した教育内容となっており、学生の授業評価や自由記載からも目標設定は妥当であったと評価できる。学生は、講義をとおして異文化の対象者を理解すること、異文化を尊重することの重要性に気付き、どうすれば助産実践につながるかを模索している段階であると考ええる。今後は講義の内容や時間数を含め、どのような教育プログラムが異文化を理解し、助産実践につながっていくのかを検討していく必要があると考える。

我が国における異文化理解と看護・助産実践における明確な教育到達目標やコンピテンシーはいまだ明確化されていない。在留外国人の増加や外国人看護師の問題等内なる国際化も進んでいる。異文化と自文化を理解し、対象者へのより細やかな助産ケアの実践ができる助産師の教育として何が必要であるか、何が求められているのかを明確化させることが今後の検討課題であると考えられる。

結 論

愛媛県立医療技術大学助産学専攻科において開講している国際助産活動論の授業評価は高く、学生の満足度は高いものであった。とりわけ、学生の熱意や発言の機会が高値であり、興味関心が高いことが明らかになった。反面、予習復習等の自己学習の項目が低い傾向を示した。主な学びの内容として、異文化理解と尊重、内なる国際化、世界的視野、自文化の理解、ジェンダー、問題解決のプロセス、国際社会に生きる助産師の姿勢があげられた。異文化の理解という点では教育目標は達成していると考えられるが、今後学生自身が学びを深め、助産実践につなげることができるような教育方法の検討が示唆される。

注 釈

I) 「クロスロード」(登録商標(2004-83439))は、吉川らによって作成された防災分野のリスク・コミュニケーションを学ぶ方法として開発されたゲーム・シュミレーションである。クロスロードの研修会受講後、筆者が開発途上国用に事例を作成し、講義で使用しているものである。

引 用 文 献

1) 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書 厚生労

働省 (13/10/19)

www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/so420-13.pdf

- 2) 吉川肇子, 矢守克也, 杉浦淳吉 (2009): クロスロード・ネクスト p.14-15, ナカニシヤ出版
- 3) 吉野純子 (2006): 国際看護教育の現状と課題, インターナショナルナーシングレビュー 2006年7月, 20-22
- 4) American Association of Colleges of Nursing (13/7/21): CULTURAL COMPETENCY IN BACCALAUREATE NURSING EDUCATION <http://www.aacn.nche.edu>
- 5) Aboriginal Nurses Association of Canada (13/7/21): Cultural Competence and Cultural Safety in Nursing Education <http://www.anac.on.ca>

要 旨

愛媛県立医療技術大学助産学専攻科で平成24年度から開講している「国際助産活動論」の授業評価アンケートおよび講義終了後のリフレクションシートから、国際助産教育の取り組みの現状と課題について分析した。

授業評価は高く、学生の満足度は高いものであった。とりわけ、学生の熱意や発言の機会が高値であり、国際助産に関して興味関心が高いことが明らかになった。反面、予習復習等自己学習の項目が低い傾向を示した。主な学びの内容として、異文化理解と尊重、内なる国際化、世界的視野、自文化の理解、ジェンダー、問題解決のプロセス、国際社会に生きる助産師の姿勢があげられた。異文化の理解という点では教育目標は達成していると考えられるが、学生自身が学びを深め、助産実践につなげることができるような教育方法の検討が今後の課題である。

謝 辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に感謝いたします。

なお、本研究の一部は第16回国際看護研究会学術集会にて発表した。

表2 国際助産活動論での学び

(授業評価・リフレクションシートから自由記載の抜粋)

学びの内容	自由記述
1. 異文化理解と尊重	<ul style="list-style-type: none"> • 相手の文化・相手の生活を知る。 • その土地にあった方法を見つけていく。 • 先入観を捨て、真っ白になり、相手のこと（価値観や文化など）を受け入れることの大切さ。 • その国に起こっている問題を解決するためには、その国の文化を尊重しながら解決する必要がある。その土地に適切な考えや文化を受け入れ、適応できるように対応する必要がある。 • 自国を基準に世界の状況を捉えてはいけない。 • 他国を見る時、その国の文化や風習、環境や国の状況、物の考え方など様々な角度と広い視野を持つことが重要。 • 自分だけの価値観で行動するのではなく、その国、その人の文化や大切にしているもの、考え方を受け入れ、どうすれば自分も受け入れてもらえるか考え、行動していくことが大切。世界と日本の文化は少しずつ異なるので、特にこの姿勢が必要。 • 母子保健活動を行う上で、女性だけでなく男性など他の人々を巻き込んだ働きかけが必要。その国にあった働きかけ（村のトップに働きかけるなど）が必要。 • 現地の人が支援に参加することで、その土地に適切な支援ができ、その国の人が納得できる。
2. 内なる国際化	<ul style="list-style-type: none"> • 日本においても異国・異文化の人とかかわることが日常的になりつつある。 • 自分次第で国際社会の中で助産師として働けると気づけた。国際と聞くと、海外での活動やボランティア活動などをイメージしていたが、国際的な母子保健の現状や課題を知ることで、日本においても国際助産活動ができると思った。 • 外国の人が日本で出産する時でも、文化を受け入れる姿勢や尊重した支援がどこまでできるかを考えさせられた。 • どうやって言葉や文化の壁を乗り越えていくかということが課題。自分がその距離をなくすことができるような技術を身につけていくことが大切。 • 助産師になってすぐ世界で活動するわけではなくても、日本の危機的な状況を知り、自分も関わる可能性があるかもしれない。その時はどう関わろう？と考えるきっかけになった。 • 実習で外国人母子をうけもたせていただくかもしれないと聞いたので、その時はどうコミュニケーションを取って分娩をすすめていけば安全に満足できるお産ができるのかということもイメージできた。 • 外国の妊産婦さんと出会う機会は必ずあると思うし、その時にどのように対応して、お互いに理解しあえるか、他の妊産婦さんと同じようにケアできるかについて、もっと考えて実際に出会った場合に実行に移していきたい。 • 国際の講義は普段の助産技術の講義と全く別物ではなく、あるものを工夫して援助するとか、伝統を守るとか、日本の施設で働くにしても役に立つ部分や大切にしなければならないことを学べた。
3. 世界的視野	<ul style="list-style-type: none"> • 貧困：先進国にも後進国も関係なく解決することがむずかしい。 • 貧困に対しては何をすることができるかということの一つ一つ考えていくことは大切。 • その土地の人々の特徴や文化、歴史などきちんと考慮し、確実に根付く為現地で教育の必要性を強く感じた。 • 社会全体で他国について、世界全体の問題についてしっかりと目を向けていかなければならない。 • 世界の情勢に興味関心を持つことが必要だと思った。ほんやりしていると情報は入ってこないし、自分に全く関係のないことだと思ったことでも、実際は別のどこかで自分にも関係があることだったりする。そもそも自分に全く関係のないこと等一つもないのではないか。 • 日本にいる私にも決して関係のない話ではない。 • 私が知ることができたのは、世界のほんの一部のことだと思うし、まだまだ過酷な現状にさらされている母子が多くいると思う。自分に何ができるのか、まだ学生でイメージがつきにくいですが、こういった現状を知れたことが私にとってはとても意味があった。 • 普段の生活や講義では、他の国のことについて目を向けたり考えたりすることはあまりないけど、いろいろな国の現状について知り、その地域の母子保健について考えるととてもいい機会になった。 • 世界の母子が置かれている現状を見て、満足できるお産ができるかどうか以前に生命の危機にさらされている母子が多くいることを知り、助産師が幅広く活動していることを知った。 • 日本のことしか目を向けていなかった。視野が狭かった。海外の現状を知ることで、日本の問題を少しでも改善することができるかを導き出していけることもあると感じた。

学びの内容	自由記述
4. 自文化の理解	<ul style="list-style-type: none"> • 日本の文化が、日本の考えが全てではない。正しいわけではない。 • 自分の考え、価値観が全てではない。正しいわけではない。 • 日本で、世界で当たり前ではなくて、自分は恵まれていることを心にとめたい。 • 今の現状＝常識や普通なことと捉えてしまうことは恐ろしいことだと思った • 日本であることが当然のこととして認識されてしまうけれど、いろいろな国のことを学んでいく中で、日本であることが必ずしも当然のことではなく、良いところもあれば、悪いところもあると、一歩距離をおいて見つめなおすことができた。 • 自分や自分の国の現状を知る必要がある。 • 日本の医療制度や助産の捉え方が決して良いわけではない。日本社会のあり方や環境を真剣に考えるべきだと感じた。 • 援助の為に自分の国で良いと思っていたものが他国の環境では全く使いものにならなかったり、逆に使うのに不便だったり自分が使って便利だからといって他の国の人にも全てそのまま受け入れられ、通用するものではないということ学んだ。 • 他国から日本の妊娠・出産に対する考え方をみると、今後どのようにすべきなのかを考えさせられた。 • 医療の質ではなく、大切なのはお母さんや家族の思いにどれだけ添えているかということであり、その点でいえばまだまだ日本も他国を見習うべきところが多い。
5. ジェンダー	<ul style="list-style-type: none"> • その国で培われてきた伝統・文化により性は平等ではなく、それが母子保健に大きな影響を与えている。 • 国によって女性の地位や立場が様々であること。自分の国では当たり前であることが、その国ではあたりまえではないこと。 • 女性の社会的な地位は低くても、妊娠、出産、子育ての面では大切にされている国もあれば、日本のように女性の社会的進出は著しい国でも、妊娠・出産・子育てに関しては厳しい国があること。
6. 問題解決のプロセス	<ul style="list-style-type: none"> • 後進国など医療体制が十分とは言い難い国への支援では、すばやい優先順位の判断が必要で、ゲームをとおして判断能力の必要性を学んだ。 • きちんと話し合いをして相手の意見の良い面、悪い面、自分の意見のメリット、デメリットを伝え合うことで相手の意見の良さが見えてきたり、自分の不足している点などがわかってよりよい判断につながるのではないかと思った。自分の考えに固執しない柔軟な考え方が求められてくると思うので積極的に意見交換をしていくことの重要性を学んだ。
7. 国際社会に生きる助産師としての姿勢	<ul style="list-style-type: none"> • 前提条件として、自分自身が持つ揺るがない助産師観と未来の子どもの幸せや豊かさ、平和について常に考えられることが必要。 • 世界の子どもの幸せはこれからの未来の世界の豊かさにつながることで、助産師は母子の未来を保障していく重要な役割を担うべき存在である。 • 同じ先進国でも分娩に対する考え方は大きな差があること。 • どんな状況であっても妊婦さん、赤ちゃんのためのお産となるよう自分ができることを精一杯やって受け入れてもらい、わかってもらえるよう関わりたい。 • 日本で、世界で、どうすれば母子保健に貢献できるかを考えることが必要。 • 自分が抱いた「世界の母子保健を改善するために役に立ちたい」という思いをずっと大切に持ち、一歩一歩進んでいきたい。 • 今回の授業で学んだことや得た視点から将来を見据えて自分にできることをコツコツ積み重ねて、いつか世界で活躍できる国際助産師となれるように取り組んでいきたい。 • 経験をする事の大切さ、現地に赴き、実際の現場を感じ、現地の方と交流することで自分なりの視野で学びたいことを学べると感じた。 • 様々な国があり、衝撃を受けるような現状や光景を目の当たりにした。様々な問題が起こっていることも知った。自分でも何か少しでも問題解決できることがあるのではないかと思い、実際に現地に行って活躍したい。 • 機会があれば外国に行き、その国の妊娠・出産の現状を自分の目で見てきたい。 • 卒後すぐには難しいが、基本技術をしっかりと身につけて、いつか国際活動に関われる活動もしていけたらいいなと思った。